

【特集企画】

## 「栄養環境変化に対する適応機構」

超高齢化社会に突入したわが国において、高齢者の身体機能の変化とともに、栄養状態の加齢性変化が注目されている。特に 75 歳以上の後期高齢者では低栄養に陥りやすいとされており、様々な健康障害や老年疾患の要因として重要性が高まっている。高齢者で見られる低栄養状態を引き起こす原因として、社会的や精神的なものから、加齢による食事摂取量や咀嚼・嚥下能力の低下、消化・吸収・代謝能力の低下、疾病の影響まで、多岐に渡る因子群の関与が報告されている。そのため健康寿命延伸の実現には、高齢者の低栄養を予防し、栄養状態を改善に導く介入方法の開発が必要とされている。このような背景から、栄養環境に応答し生体の恒常性を維持するメカニズムを理解することが、高齢者を取り巻く低栄養状態の改善に繋がっていくと期待されている。

本特集号では、近年明らかにされてきた栄養環境変化に適応する体内メカニズムに焦点を置き、本分野で最先端の研究を展開されている 4 人の先生に生体恒常性維持への関与について執筆をお願いした。日野信次朗先生（熊本大学）には栄養を介した環境応答性エピゲノム制御について、小幡史明先生（理化学研究所）には栄養素、腸内細菌を介した食餌要因の寿命への影響について、佐野浩子先生（久留米大学）には栄養状態と内分泌ホルモンとの関係について、伊藤孝先生（理化学研究所）には栄養センサーを介した老化制御についての総説をそれぞれご執筆して頂いた。

特集企画担当編集委員

赤木 一考

多田 敬典